

平成30年6月27日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K06401

研究課題名(和文) 博物館ネットワークによる近世大坂の建築史・都市史研究の構築と展示公開

研究課題名(英文) Construction and exhibition of architectural history / urban history research in the Edo period by museum network

研究代表者

谷 直樹 (Tani, Naoki)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・名誉教授

研究者番号：40159025

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世大坂の建築史・都市史研究を発展させるために、在阪の博物館(資料館、市史編纂室などを含む)のネットワークによって、当該機関が所有する博物館資料を検索し、写真撮影とデータベース化を進め、建築史・都市史の視点で作品研究を深めるとともに、展示による情報公開を実施することを目的としている。建築史分野では、大坂の町家の研究、大坂蔵屋敷の研究と展覧会の開催、都市史分野では、淀川の景観の研究と展覧会の開催と、船場の建家図面のCAD化を行った。本研究により、博物館に個別に収納されている建築史・都市史関係の資料を集中的に収集し、市民に公開することで大きな成果があがった。

研究成果の概要(英文)：A purpose of this study is to develop the study more in history of building of Osaka, the city history in the early modern times. I built the network of the museum of Osaka and took a picture of the history document which each museum collected and made a database. And, by history of building and a study method of the city history, I deepened a study. Furthermore, I carried out an exhibition and showed it to a citizen. In the field of the history of building, I studied "MACHIYA of Osaka" and "KURAYASHIKI of Osaka" and performed an exhibition. In the field of city history, I held a study and an exhibition of the paysage of Yodogawa. In addition, I made the CAD data of "the house drawing" of SENBA. From the enormous documents which a museum of Osaka owned individually, I searched history of building and a document of the city history and studied it. I obtained big result by having shown a newer document to a citizen.

研究分野：建築史・都市史

キーワード：建築史 都市史 景観史 近世 大坂 博物館

1. 研究開始当初の背景

近世都市を取り上げた研究は近年活発に行われている。建築史・都市史の分野では、江戸や京都、そして地方都市を取り上げた研究で大きな成果が上がっている。それに対して、大坂の研究は相対的に立ち遅れていると言わざるをえない。その原因は、

博物館(資料館や市史編纂室も含む)が収集した資料の公開が進んでいないこと、

博物館資料が建築史・都市史の視点で抽出されていないこと、博物館の学芸員に研究者番号がないものが多く、科学研究費に応募できない、などの理由が挙げられる。

そこで今回の科研では、大阪市立住まいのミュージアム館長の立場で博物館のネットワークを構築し、大阪の博物館資料の中から近世大坂の建築史・都市史関係の資料を検索・再評価し、その成果を展覧会にまとめることとした。

2. 研究の目的

本研究は、近世大坂の建築史・都市史の研究をさらに発展させるために、大阪の博物館(資料館や市史編纂室も含む)のネットワークを構築し、当該機関が収集した関連資料のデータベースを作成して個々の研究を深化させるとともに、展示によって研究者や市民に公開し、近世大坂研究を活性化することを目的としている。

具体的には、各館の学芸員の共同研究の場を設け、建築史資料(実物も含む)、文献資料、絵画資料、民俗資料など、各館が所有する資料の中から、建築史研究・都市史研究・景観研究の視点で資料収集を行い、研究を深化させるとともに、展示を企画する。

本研究の特色は、個別の博物館・資料館が所蔵する建築史・都市史関係の資料の再評価とリスト化、江戸や京都の研究に比べて立ち遅れている近世大坂の建築史・都市史の研究水準の向上、展覧会による資料の公開と展示図録による情報発信、の3点にある。

3. 研究の方法

近世大坂の建築史・都市史研究は、文献史料による研究が圧倒的に多数を占めている。本研究は、博物館資料という「モノ」を通して、建築史、都市史を解明するところに方法上の特徴がある。事前の予測では、ミュージアムネットワークの構築を想定していたが、学芸員の勤務事情などで難しく実現性が乏しかったので、展示企画を通して資料情報の収集、撮影、データベース化、研究を進め、展示公開する中で博物館のネットワークを構築することとした。

具体的には、建築史、都市史の視点から展覧会を企画し、博物館資料を検索して作品を選定し、資料の再評価を行った。そこで、実現したのが展覧会の「淀川舟遊」展と「大坂蔵屋敷」展である。前者は都市史研究に寄与し、後者は建築史研究に寄与するものである。また、「大坂蔵屋敷」展の準備過程で、大坂の豪商である加島屋・廣岡家資料の中から加島屋の指図を発見した。これをきっかけに、近世大坂の町家建築に関する資料を収集し、特に『二千年袖鑿』所収の挿図の分析を通じて、大坂を代表する町家の表構えに関する論文をまとめた。

一方で、近世大坂の多様な町家の状況を把握するために、北船場の18か町の町家の間取図(約800戸)を集成した「建家取調図面」(明治19年作成)をCADに入力した。同図の分析はすでに研究代表者等が行っているが、今回は、最終の清書と考えられる新出資料と照合し、個別の町家にとどまらず、連続平面図による町毎の集住の様子をデータ入力することで数値分析が可能になった。今後、町並みを復元する基礎資料として展覧会の開催も視野に入れている。

4. 研究成果

) 近世大坂の建築史研究 大阪町家の研究

建築史研究のうち、町家に着目した研究として、大阪市立住まいのミュージアム所蔵の『二千年袖鑿』に着目した。同書は、出版時からさかのぼる2,000年の間に起きた事件や事象、神社仏閣、名所旧跡などを歴史年表として編集したもので、江戸後期の天保15年版と、弘化4年・嘉永2年・同5年に3冊本として増補出版したものである。その中に、大坂出身の絵師、松川半山(1818~82)の挿絵が使われている。半山は風景画を得意とし、『浪華の賑ひ』、『淀川兩岸一覽』など名所旧跡を描いた作品を残している。『二千年袖鑿』に掲載された絵画は線描の小さい挿絵であるが、大坂の川や橋、寺社や名所とともに大坂の商家が含まれている。その数は79か所にのぼり、これほど多数の大坂の町家の表構えが網羅されている資料は他になく、他都市と比較しても珍しい絵画資料である。

そこで『二千年袖鑿』に掲載された大坂の商家の職種を、江戸時代に出版された大坂の代表的な商工名鑑である『難波丸綱目』を参考にすると、「諸商人問屋仲買(薬種問屋・両替中間・材木屋仲間・酒舗・呉服物現銀店など)」「諸師芸術(医師など)」「丸散煉煎薬(売薬など)」「諸職名工(銅

吹屋・菓子屋など)、「諸国飛脚宿」(料亭など)その他に分類でき、大坂を代表する商家を網羅していることが分かった。また、そこに描かれた商家の表構えを当時の他の資料と比較検討するために、博物館が所蔵している古写真(加島屋廣岡家・鴻池家)『摂津名所図会』『浪華百景』『浪華下村店繁栄之図』などと照合したところ、絵が小さいために詳細ではないが、絵画独特の省略描写が少なく、きわめて正確に描写されていることが判明し、町家の資料として十分に有効であることを検証した。

次に79か所の町家を、職種別に大分類し、個別に分析して、近世大坂における町家の特徴を抽出した。全体的には、主屋は表通りに面して建て、店舗を設ける。主屋は中2階建てで、屋根は切妻造り、瓦葺きである。角地では入母屋造りの屋根を採用することが多い。規模の大きな町家は、店棟と住居棟に分けた表屋造りの構造となる。中2階の表側は、虫籠窓を開ける。庇は瓦葺きが一般的である。間口が広い町家では、両替商などは瓦庇を用いるが、店先で商売をする呉服屋、薬屋では柿葺きを採用している。通り庭(土間)の位置は、右と左の顕著な差はない。門口の開閉形式に関する情報はほとんどない。店の間の表側の開閉装置は、土間に近い方が平格子、奥は出格子が一般的である。また、上げ見世(ぱったり床几)が取り付けられることが多い。看板は、2階の屋根看板と庇下の吊看板に大別できる。屋根看板は、呉服商、合薬屋、菓子屋に多くみられる。豪商の屋敷構えは、主屋の横に高塀を廻らせ、客門を設け、庭に見越しの松を植えることが多い。などの知見を得た。これらは、『守貞謾稿』などの随筆で個別に述べられていたことであるが、多くのサンプルをもとに近世大坂の町家の特徴を抽出した成果は大きい。

また、職種別の特徴の中で顕著な点を指摘すると、両替屋中間の屋敷構えに共通することは、店棟と住居棟に分ける表屋造りで、店棟の表構えは中2階建てで虫籠窓をもち、庇は瓦葺き、1階は格子をはめ込み、閉鎖的な表構えになるものが多い。同様の屋敷構えは、材木屋仲間の近江屋休兵衛、銅吹屋の住友家など、大坂を代表する豪商の居宅に共通している。呉服店に共通した表構えは、中2階建てで屋根看板をあげ、壁面に虫籠窓を開け、庇は柿葺きになっている。1階の柱間はできるだけ開放的にしている。呉服店は間口が広く1階の開口が大きいので、瓦庇より重量が軽い柿庇が採用されたのであろう。呉服の反物は退色しやすいので、庇の先に屋号を染め抜いた長

暖簾をかけ、店の間に外光が入らないように注意している。合薬屋は中2階建てで、ほぼ共通して屋根看板を上げている。庇は瓦葺きが多いが、柿葺きも存在する。店の間は開放的なものが多く、薬の名前を書いた置き看板や長暖簾が特徴的である。『守貞謾稿』に「製薬店の招牌 諸賈の中に製薬店は、特に看板を精美にするなり。図のごとく庇上に看板を造るを、やねかんぱんと云ふ。大坂は往来狭き故に、江戸のごとく立て看板さらにこれなし。製薬店専らこれを用ふ。」と記されたことと符合する。菓子屋は、中2階建てで屋根看板を上げた店が多く、庇の先に長暖簾をかけている。『守貞謾稿』によると、「菓子店 京坂は看板定まる形これなし。(中略)ただ暖簾は他店と異制なり。家号およびその他を記すものは白木綿に墨書し、間は紺無地木綿をもつて縫合すこと、図のごとし。」とあり、『二千年袖鑿』の菓子屋の長暖簾もそのように描かれている。なお、菓子屋の船橋屋は嘉永元年(1848)に江戸から大坂に進出し、寄棟造り、黒壁、土蔵造りの外観であった。これは大坂における「土蔵づくりの家を建しの始なり。其嘗繕落成開店せしは夏のことにて、衆人の目を驚かせり」と『浪花百事談』に記されている。

現在、大阪の町家遺構は、江戸時代に建てられた適塾(旧緒方洪庵家住宅) 明治時代に建てられた旧小西家住宅が国の重要文化財に指定され、保存措置が講じられている。しかし、『二千年袖鑿』に収録された町家は、戦災による焼失、あるいは戦前・戦後の都市再開発による建て替えによって、その遺構は市内にまったく存在しない。『二千年袖鑿』はこれまで注目されることはなかったが、今回の分析によって、商業都市として栄えた江戸時代の大阪の町家を考えるうえで、たいへん貴重な資料であることが分かった。

大坂蔵屋敷の研究

近世大坂は「町人の町」と俗称され、武家は少数であったが、大坂の経済を担っていた両替商などの豪商の町家と対になって、大坂の都市景観を際立たせていたのが、中之島を中心に立ち並んでいた大坂蔵屋敷である。大坂蔵屋敷の研究は、これまで経済史や日本史で取り上げられることが多いが、その名前から倉庫業のイメージが強く、建物の実態はあまり知られていなかった。近年は、考古学による発掘調査が進み、大坂蔵屋敷の遺構が報告されているが、発掘範囲が限定されるため断片的なものが多く、建築史的な検討が必要である。大坂蔵屋敷の建築史的な研究は、植松清

志・元大阪市立大学客員教授によって進められており、その成果は同氏の編集になる『近世大坂の蔵屋敷に関する建築史的研究』（思文閣出版、2015年）が公刊され、谷直樹は同書の一部を分担執筆している。

本科研では、大坂の大名屋敷であるという視点で大坂蔵屋敷を取り上げ、植松清志氏のほか、経済史の分野から、宮本又郎・大阪大学名誉教授、高槻泰郎・神戸大学准教授に参画いただき、博物館資料を改めて博搜した。その成果として、2017年4月22日から5月28日を会期とする、「大坂蔵屋敷 天下の台所はここから始まる」展を開催することができた。

大坂蔵屋敷に関する資料としては、江戸時代の肉筆地図を詳細に分析し、蔵屋敷の立地を概観した。また、大坂蔵屋敷の建築指図は、すでに植松氏によって図面化されているが（『近世大坂の蔵屋敷に関する建築史的研究』前掲書所収）今回、改めて、「佐賀藩蔵屋敷指図」（日本生命保険株式会社蔵・大阪歴史博物館寄託）、「広島藩蔵屋敷指図」（大阪商業大学商業史博物館蔵）の実物資料を熟覧した。さらに、大坂蔵屋敷の屋敷内での生活を、年中行事や屏風絵を素材に、具体的に検討した。

まず、蔵屋敷の立地について、江戸前期の明暦3年（1657）の「新板大坂之図」（大阪市立住まいのミュージアム蔵）では、中之島と大川周辺に集中して立地しているが、延宝6年（1678）ごろと推定されている「中之島図」（大阪歴史博物館蔵）では土佐堀川に面して諸藩の蔵屋敷が間口を開いていて、堂島川沿いには未だ道もなく、屋敷の裏側であったことが分かる。18世紀初頭の地図や18世紀中期の「大坂三郷絵図」（大阪市立住まいのミュージアム蔵）になると、堂島川に沿って蔵屋敷が林立し、邸内に舟入堀を設けて、蔵物を直接搬入できるような工夫がなされている。この間、貞享年間の河村瑞賢による大坂の河川整備が進行し、堂島川の護岸工事による沿岸の宅地化が進み、舟入堀をもつ大型の蔵屋敷が出来上がったことが推定できた。

次に、蔵屋敷の指図を大名屋敷という観点から、屋敷内の諸施設に着目し、舟入堀、米蔵、門、御殿、武家長屋、出入商人の長屋、鎮守などに分類してそれぞれ詳細に分析した。米蔵は敷地の周囲に配置されることが多く、梁行3.5間～4間、桁行は長大なものでは20間以上に及ぶものがあった。

大坂蔵屋敷の屋敷構成を考えると、植松氏が分析しているように、大きく「西国型」と「東国型」に分類できる。「西国型」は米蔵・役所・会所・銀蔵・御殿・長屋・鎮守社・貸家などがあり、「東国型」は米蔵

と金蔵が中心で、規模は小さく御殿はない。

この分類は、現存する江戸中期以降の大坂蔵屋敷の指図から結論付けたものである。それ以前の大坂蔵屋敷は、次のような発展過程が想定できる。1期は17世紀の藩邸で、関ヶ原合戦直後の慶長10年（1605）の佐賀藩天満屋敷では、「家（殿舎）并米蔵」が存在し、米蔵には兵糧米を保管したと推定されている。蔵屋敷の指図が残る最古の事例は、慶安元年（1648）の岡山藩の「大坂蔵屋敷絵図」（岡山大学附属図書館蔵池田家文庫絵図）で、敷地の中央に御殿と台所があり、四周に米蔵や武家長屋が配置されている。2期は17世紀末から18世紀初頭のもので、17世紀末に行われた堂島川の護岸工事をきっかけに、大きな舟入堀をもち、米蔵、御殿、武家長屋などを配した蔵屋敷が現れる。「佐賀藩蔵屋敷指図（元禄図）」がその代表例である。3期は17世紀中期以降のもので、米蔵、舟入堀、御殿のほかに、鎮守社が勧請され、蔵屋敷祭礼がおこなわれるようになった。3期のきっかけは享保9年（1724）の妙智焼の大火により、大坂の蔵屋敷がほとんど焼失したことである。大火後に再建された蔵屋敷は、「佐賀藩蔵屋敷指図（享保再建）」や「広島藩蔵屋敷指図」が代表例である。

大坂蔵屋敷は諸藩の大坂藩邸であることから、出入の豪商以外は大坂の都市社会との関係が薄いと考えられがちであるが、18世紀中期以降、藩邸内に鎮守社が勧請され、祭礼の日には邸内が公開されたことから、市民社会とのつながりが深まった。鎮守社の多くは稲荷社であるが、中には国元の名社を勧請するものもあった。例えば、広島藩の厳島社、高松藩の金毘羅社、福岡藩の太宰府天満宮、柳川藩の水天宮、熊本藩の清正公などで、それぞれのご利益を求めて大坂の市民が参詣した。江戸後期の『繁花風土記』によると、「当月、諸方御蔵屋敷祭礼、中国・四国・出雲・阿波・肥前・筑後・薩摩立売堀下屋敷・柳川、右之他あまたあれど略す。右、祭礼の日は芝居、にはか、はなし、物まね、造り物などの催しありて神慮をやすめ給ふ事也」と記されている。蔵屋敷祭礼では「造り物」が飾られたことが分かるが、三菱資料館の資料調査によって、明治初年の土佐稲荷における造り物の下絵を見出すことができた。さらに、明治維新で蔵屋敷は廃止されても、鎮守社は残り、土佐稲荷のように現在も存続している神社があり、現地調査を行ったところ社殿はいずれも失われているが、石灯笼などに蔵屋敷時代の遺品が残されていることが判明した。

一方、大坂蔵屋敷における年中行事は文

献上ではいくつか知られているが、今回、大阪商業大学商業史博物館所蔵の「年中行事」と個人蔵の「久留米藩蔵屋敷屏風」を照合した結果、蔵屋敷の1年の行事が具体的に判明した。これまでの解説の一部を訂正することができた。また、福岡藩大坂蔵屋敷の蔵元奉行兼勘定奉行をつとめた大岡克俊の大坂滞在日記である「浪速詰方日記」(大阪商業大学蔵)を見ると、来坂中に、住吉社や天満天神など大坂の著名な寺社、高松藩蔵屋敷の金毘羅社、天神祭の船渡御見物、道頓堀の芝居小屋や難波新地の見世物などを見物している。また、蔵屋敷出入の商人や大坂の豪商との付き合いを深め、加島屋・廣岡久右衛門とも交流していることが具体的に判明した。

なお、展覧会に合わせて図録『大坂蔵屋敷』を刊行し、編集は谷直樹が行い、戸柱美智代・大阪市立住まいのミュージアム学芸員が補佐した。グラビアページは、「大坂蔵屋敷の成り立ち」「描かれた大坂蔵屋敷」「大坂蔵屋敷の行事と暮らし」「大坂蔵屋敷と豪商たち」からなり、谷直樹と高槻泰郎・神戸大学准教授が解説を執筆した。また論攷として、「中之島の蔵屋敷と堂島の米市場」(宮本又郎氏)、「大坂蔵屋敷の建築と変遷」(植松清志氏)、「豪商・加島屋(廣岡)久右衛門と大坂蔵屋敷」(高槻泰郎氏)を収録した。

) 近世大坂の都市史研究

淀川沿岸の景観研究

近世の大坂は、大阪湾から瀬戸内海に開かれ、一方では淀川を通して京につながる交通の結節点に位置していた。淀川は、人と物、情報を運び、大坂の文化をはぐくむ動脈の役割を果たしてきたといえる。淀川沿岸の景観研究は、このような問題意識のもとで、淀川にまつわる絵画作品、名所図会や地誌の類を収集し、その研究成果として、「淀川舟遊」展を開催した。

主な博物館資料として、京都国立博物館、大阪歴史博物館、大阪商業大学商業史博物館などの協力を得て、伊藤若冲筆「乗興舟」、円山応挙筆「淀川両岸図巻」の模本、田能村小斎筆「浪華大川眺望図」、佐野龍雲筆「住吉図」などの基礎調査を行い、展覧会に展示した。

展覧会に際して、谷直樹、岩間香・摂南大学教授、服部麻衣・大阪市立住まいのミュージアム学芸員が図録『淀川舟遊』を編集した。グラビアページの解説は、谷直樹、岩間香氏のほか、松浦清・大阪工業大学教授、明尾圭造・大阪商業大学准教授が分担執筆し、研究編では「淀川の城」(谷直樹)、「伊藤若冲<乗興舟>」(岩間香)、「<よ

と川の図>の風景」(服部麻衣)、「米山人の隠棲すを示唆する画讃について」(松浦清)、「大川納涼図にみる大阪の遊び」(明尾圭造)などの論攷を掲載した。

伏見から大坂に至る淀川両岸の景観については、円山応挙、伊藤若冲、大岡春トなど江戸中期の一流の絵師の風景画が残されており、また幕末には『淀川両岸一覽』などの案内記も刊行されるなど、沿岸の四季折々の風景が当時の人々に受容されていた。大坂では、川と水にまつわる文化や暮らしを反映した景観が、当時の人々にとっても特色として意識されていたことが分かった。

この展覧会では、大阪市立住まいのミュージアムが所蔵する新出の「よと川の図」(折本)が展示された。その作品研究によると、同図は18世紀末ごろの成立で、大坂の中之島から伏見に至る両岸の風景と風俗を細かく描いていること、中之島にあった福岡藩の大坂蔵屋敷が大きく取り上げられ、蔵屋敷内部の建物や暮らしが生き生きと描かれていること、そして「よと川の図」の注文主として福岡藩蔵屋敷の関係者が想定されることなど、新しい発見があった。

また、岡田米山人、岡田半江など、大坂の文人画が展示されたことも重要であった。これまでの日本美術史では、江戸初期の狩野派や土佐派、琳派、そして江戸中期以降は応挙の写生画などが評価されていて、文人画は高い評価を与えられていない。しかし、近世の大坂では、町人の間で文人画が流行し、商家に伝存する作品も多い。近世都市・大坂の文化を考えると、これら文人と文人画を再評価する重要性が浮かび上がったのも、この展覧会の成果であった。

さらに、幕末の大坂の風景を描いた、松川半山、森一鳳、西山完瑛、そして昭和戦後まで活躍した菅楯彦などの作品が展示され、これらの資料が建築史・都市史の研究素材になることが分かった。近世大坂の都市景観を解明するために、美術史研究との共同研究が必要であることを改めて指摘しておきたい。

町の集住形態

近世の大坂三郷は、30万人から40万人の人口を擁し、高密度居住であったことは知られている。大坂の町数は、約650町とされるから、単純に計算して、1町内に500人前後の住人がいたことが分かる。一方で、町家の平面などは個別に知られているが、それらが集住した空間形態はほとんど知られていない。

今回分析した資料は、北船場の18か町（北浜3～5丁目、今橋3～5丁目、高麗橋3～5丁目、伏見町3～5丁目、道修町3～5丁目、平野町3～5丁目）の町家の間取図（約800戸）を集成した「建家取調図面」（明治19年作成）である。同図の分析はすでに研究代表者などが行っているが、近年、新たに「建家取調図面」の清書を（個人蔵）発見することができ、これまで知られていた愛日文庫蔵本・同図の下絵と相互比較しながらCADデータに入力した。その結果、個別の町家の敷地利用状況、土間面積、床上面積、1階面積、2階面積、建蔽率、容積率などを算出し、さらに、連続平面図による町毎の集住の模式化、戸建て、長屋建ての面積比、建蔽率、容積率などの基礎データを得ることができた。

このデータをもとに、町家の上部構造の復元、町内の連続立面図、そして町の集住形態の復元などが可能になったが、それは今後の課題である。

以上で、3年間にわたる「博物館ネットワークによる近世大坂の建築史・都市史研究の構築と展示公開」の研究を終えた。在阪の博物館や資料館などに個別に収納されている建築史・都市史関係の資料を集中的に収集でき、市民に公開するなど大きな成果があった。

なお、本研究の過程で、近代大阪の建物や都市景観に関する絵画資料や写真資料を収集することができた。その結果、展覧会「大大阪モダニズム 片岡安の仕事と都市の文化」の企画に発展し、平成30年夏に開催が実現したことを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

谷直樹、『二千年袖鑒』にみる幕末期の大坂の町家、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報、査読無、15号、2017、17-47

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計2件）

谷直樹・岩間香・服部麻衣編、大阪市立住まいのミュージアム刊、淀川舟遊、2015、1-80

谷直樹編、谷直樹・宮本又郎・植松清志・高槻泰郎執筆、大阪市立住まいのミュージアム刊、大阪蔵屋敷、2017、1-80

〔その他〕

ホームページ等

大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）HP <http://konjyakukan.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷直樹 (Tani Naoki)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・名誉教授

研究者番号：40159025

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

岩間香 (Iwama Kaori)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：50258084

(4) 研究協力者

服部麻衣 (Hattori Mai)

大阪市立住まいのミュージアム・学芸員

戸柱美智代 (Tobashira Michiyo)

大阪市立住まいのミュージアム・学芸員